

題 目 除去土壌問題を題材とした市民参加ワークショップの評価—討議の質の評定—

氏 名 木原なな

指導教員 大沼進

除去土壌の県外最終処分・再生利用を巡り、国民全体での議論が必要であるが、問題認知度は低い。このようなリスクの負担配分をめぐる問題では、単に科学技術についての理解を深めるだけでなく、社会的・倫理的観点からの議論も必要である。本研究は、市民参加ワークショップを開催し、当該問題にあまり関心や知識のなかった都市住民がどのように発言し、どのような認識を形成するかの評価を試みることを目的とした。一般市民が参加し議論する場においては、意見の変容ではなく熟慮を通して意見形成や深まりが重要とされる。加えて、相手への慮りや多様な価値の系に基づいたかどうかなども重要視され、これら进行评估するために発話から熟議の質を測定する手法も開発されている。以上を踏まえ、ワークショップを通じた参加者の意見の質的な深まり、発話にみられる尊重や価値の系、トピックに対する認識の深まりについて評価した。ワークショップは、除去土壌問題に関する複数の分野の専門家と、問題になじみのない参加者が話し合う、双方向型の科学技術コミュニケーションを組み込んで開催した。参加者はいずれも都市住民で、研究1では東京で1度、研究2では東京と大阪で1度ずつ開催した。発言の分析から、研究1と研究2で一貫して、施策への評価の観点の変化や、国民的議論の重要性に対する認識の深まりがみられ、除去土壌の再生利用に関して肯定的な回答が得られた。しかし、尊重や共通善への言及については研究1と研究2で異なる傾向がみられた。研究1では相互に尊重するような発言、問題における最不遇者をはじめとするその場にはいない主体への配慮、多様な観点から社会全体の望ましさについて言及された。だが、研究2では、福島の人びとへの慮りは最終的にはみられなくなり、一貫して特にリスク・コストの観点から社会全体の望ましさについて発言されていた。また、研究2の大阪会場においては、県外最終処分に否定的な見解が目立ってみられた。さらに、尊重については、問題における最不遇者を慮らない発言がみられた。全体としては、再生利用の安全性に関する理解などの面では、熟議、双方向型の科学技術コミュニケーションによる一定の効果が示された。しかし、研究2では、これまで負担を引き受けてきた福島の人びとへの慮りがあまりみられず、リスクとベネフィットの軸の評価ばかりがみられたことについては課題が残った。